

「御国が来ますように」

～ 慣習と神の定め 真理に生きるには ～

マルコ2：14～17

私たちは、しばらく目線について学んでいます。私たちの目は、自分の都合の良いように色を変えたり、環境によって色が変わって見えます。私たちの願いも同様です。自分たちの目線と神さまの目線が違うので、自分の願ったものと違うものが神さまから与えられると落ち込みますが、そうではありません。自分たちの目線で見ている狭い範囲で物事を決めつけて神さまに願ってしまうのです。私たちは、その願ったものをもらうために神さまとの関係があるのではなく、本当の自分を見つけるためにそれを願うのです。

■ そもそも「御国が来る」とは

御国が来ると言うことは何かが無くなるということです。聖書で言う御国が来ると言うのは、自分たちの心に御国が来ると言うことで、これは自己中心が無くなるということです。つまり今まで持っていた自分の価値観が変わるということです。御国とはゴージャスな場所の話ではなく、私たちが愛し本当の姿を見出したいと願う父なる神さまのおられる場所です。だから「御国が来ますように」と願うと、自分の心の中にある自分の考えとは違うものが与えられるのです。

■ 神の定めとは。何のためのルール(慣習)なのか

安息日と言うものは、元々は一週間働いた最後の日は神さまと過ごして、本当の自分を再び見出すために制定された日でした。しかし、それが伝承されていく中でルールだけが厳しくなって、違反するとどうなるかというところに目線が行って、違反者を探すようになりました。これは、現代も同じです。ルールのためのルールになってしまっているのです。

イエスさまは、中風の人に「あなたの罪は赦された」と言いました。その場にいた律法学者たちは「神をけがしているのだ。神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう」と怒りました。するとイエスさまは『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け』と言うのと、どちらがやさしいかと言われました。律法学者は中風の人に対して「立てないのはお前の罪のせいだ」と言っていました。中風の人にとって病気であることよりも罪人と言われることの方が辛かったのです。このようにズレた目線での間違ったルールは人を罪人に仕立て上げてしまいます。

■ あなたは、どちらを選ぶのか

取税人レビは、ローマ帝国が雇ったユダヤ人から税を取り立てるためのユダヤ人でした。同胞なのにローマ帝国に仕えているレビのことをみんな嫌っていました。そんな嫌われ者の彼のもとにイエスさまは行ったのです。ザアカイもそうでしたね。ザアカイもお金持ちでしたが嫌われ者でこの心の空白をイエスさまなら何とかしてくれると、木に登ってまでイエスさまに会いに行き、変えられました。このレビも同じでした。取税所に「座って」いたレビはイエスさまに「ついて来なさい」と言われ、「立ち上がって」「従った」のです。

この「座って」「立ち上がって」を原語から意味解きます。この言葉が使われているのは創世記4章のカインとアベルの物語です。「座る」は原語で「ヤーシャヴ」と言い「神の御前から離れる、さすらう」と言う意味です。カインが嫉妬からアベルを殺してしまった後、主の前から去ってエデンの東・ノデの地に住みつきました。この「ノデ」は「逃亡」「流浪」と言う意味です。つまり、この「座る」は「神の御前から離れて逃げ続けて流浪の地に住みついた」と言う意味になります。まるで自分を見ているようです。また「立ち上がる」は原語で「クーム」と言い「立ち向かう、殺す」と言う意味です。カ

インがアベルに「野に行こうではないか」と言った場面です。レビもイエスさまから声をかけられた時「よし！行こう」と立ち上がったのです。しかし動機がカインと同じでした。自分のために誰かを犠牲にするということでした。すなわちイエスさまを十字架にかけると言うことを表しています。私たちの人生は、誰かの犠牲すなわちイエスさまの十字架の贖いのもとに成り立っているのです。イエスさまの犠牲の贖いの上に立ち上がったのに、問題から逃げ続けて流浪の地に住みついていたのでは意味がありません。レビが「変わりたい」と立ち上がり、イエスさまに従おうとした時に変えられたように、神さまは、赦されない失敗を犯した私たちを自分の犠牲をもって赦し、カインにエノクを与えられたように私たちにも新たな道を与えられます。あなたは「座る」「立ち上がる」のどちらを選びますか？

■ 犠牲の上に生きている。十字架の贖い。イエスに従う

アベルの姿を通して、イエスさまの十字架の贖いを見てきました。私たちが自己中心に立って人を指さし罪を犯すからイエスさまの手は杭で打ち付けられました。勝手に歩き回り罪の道を歩もうとする足の代わりにイエスさまの足が杭で打ち付けられ自由を奪われました。私たちの真っ黒な心を癒すために槍で突かれ、私たちが受けた痛みのためにいばらの冠をかぶられました。十字架はただのモチーフではありません。私たちの教会には3本の十字架が描かれています。何の罪も無いイエスさまを中心として罪人が両脇にいます。一人は自分の罪を認めませんでした。もう一人はイエスさま出会い自分の罪を認め、素直になり彼の心に御国が来しました。御国が来るとは、私たちの心に変化が起きると言うことです。今までの見方が変わるということです。心が変わると見方が変わります。今まで自分の理屈でがむしゃらにやってきて、勝手に決めつけて、ルールで裁いて失敗してしまいました。だから、まるで親猫に運ばれる仔猫のように神さまに全てを委ねましょう。

■ 最後に

最後にレビが立ち上がって「従った」の「従う」は原語で「ハーラフ」と言い「歩く」と言う意味で創世記2:14で用いられています。そして従うとどうなるかが28章13-15に書かれています。カインはアベルを殺そうと立ち上がりましたが、アベルの犠牲によって贖われました。同様に私たちがイエスさまの十字架の贖いによって罪赦され祝福を受けています。この世の富を手に入れて、外側を着飾っても何の意味もありません。大切なのは内側、心です。だから私たちは心を残します。主からの平安を残します。そのためには自分を知る必要があります。自分の心を見て、罪や間違った価値観があることを認め、十字架上のイエスさまに「私の罪を赦してください」と言うことが出来れば、私たちは変わります。自己中心なルール(慣習)は私たちが苦しめますが、神の愛は私たちを変えます。心に御国が来るのです。そうすると本当の自分の姿に戻れます。だから「御国が来ますように！」と求めていきましょう。

(要約者:行司 佳世伝道師)

(2022年8月21日)